

令和5年度第1学期始業式式辞（放送）

おはようございます。希望の春を迎えました。令和5年度のスタートです。穎明館生の皆さん、春休みに不足を補い、ずれた方向を修正し、年度の境を乗り越えてきましたか。新年度、新学期、やる気、意欲を高めて今、新学年のHR教室の席に座っていることでしょうか。

さて、今日は「未見の我」と「啐啄同時」という話をします。

皆さんは「未見の我」という言葉を聞いたことがありますか。吉田松陰の言葉とも言われていますが、「未見の我」とは、皆さん自身がまだ知らない自分自身のことを言います。

私たちは、自分のことは自分が一番、よくわかっていると思いがちです。確かに、家族や友達と比べても、自分ほど身近な存在はありません。それでも、皆さんは直接に自分の顔を見たことがありますか。鏡や写真を通してしか見たことがないでしょう。また、自分の性格や内面については、他の人が指摘してくれることを通じて知ることもあります。自分自身は身近な存在であり、疎遠な存在ともいえるかもしれません。

だからこそ、今までの自分の理解で自分自身を閉じ込めないでほしいと思います。皆さん一人ひとりには、自覚していない、皆さんならではの優れた素質や可能性があるはずです。昨日の中学校入学式では「天からの手紙」の話をしました。

「人間は生まれた時に天から一通の手紙を受け取っている。その手紙には、その人の命の使い方が書いてある。一所懸命に勉強したり、働いたりしているうちにその手紙を開けることができるようになる。」

天から与えられた手紙、使命などというところと少々、オーバーに聞こえるでしょうか。

昔の教え子に勉強が苦手な生徒がいました。とくに英語が苦手で、よく赤点を取っては呼び出して注意を与えていました。その生徒が、海外体験学習でシアトルを訪れた後、「先生、僕は一所懸命、英語を勉強して、英語を使った仕事に就くから……」と言いにきたのです。「そうか、頑張れよ」と言ったものの、「どこまで本気かな」と半信半疑でした。それでも、その後は英語の成績が急上昇し、第1志望大学に合格。商社に就職し、今や世界的に活躍しているそうです。きっと、その生徒の場合は、シアトルで「未見の我」に出会ったのだと思います。そして一所懸命に努力して、「天からの手紙」を開けられたのでしょう。

未見の我を知れ——令和5年度、穎明館生の皆さんが、まだ知らない自分、可能性に満ちた自分に出会うことを願っています。

もう一つ、「啐啄同時」の話をしてします。

卵から雛がかえる時、親鳥は卵の殻の外からつつきます。それに合わせるように雛が卵の中からつつくのです。親鳥と雛鳥のつつきが一致して、殻は割れ、初めて雛がかえります。このことを禅宗では「啐啄同時（啐啄同機）」と言っています。令和5年度も、授業やHR活動を通じて、先生方は親鳥として皆さんをつつきます。皆さんも雛鳥として卵の内側からつついてほしい。両者が一致して、皆さんの新しい生命が誕生するのです。新しい生命は、「未見の我」といっても差し支えないでしょう。卵の内側からつつくということは、まだ知らない自分を、自分の力で創っていく情熱なのだと思います。情熱を大切にしてください。

私はというと、校長として昨年度、6年生対象に行ったHR行脚を全学年、全学級で行うつもりです。式辞の放送だけでなく、生徒の皆さんや先生方に直接、語りかける、対話する機会を持ちたいとの思いです。私自身、「啐啄同時」に関わりたい。コロナ禍で、なかなかできなかったアクションを起こして、「未見の我」に出会いたい。穎明館生の皆さん、ともに「未知の自分を発見するぞ」との決意で努力していきましょう。

式辞の結びは、創立者堀越克明先生の定めた校訓とモットーです。学校法人堀越学園100周年の節目の年、学校としても新たな成果を目指していきたいものです。

新6年生、37期生の皆さん、いよいよ受験学年になりました。進学校穎明館では受験生こそがリーダーです。可能性を信じて、強気で挑戦する1年にしましょう。「未見の我を知れ」——受験生として「未知の自分を追い求めていく」、その頼もしい姿を後輩の皆さんも見習って行ってください。

穎明館生の皆さん、今年度も校訓、モットーを胸に、常に目標、意識を高くもって努力することを期待します。

【校訓】

「 人生は何ごとに依らず その目標は高く設定すべきである
その推進には 高い知性と理性を必要とする 」

【モットー】

「 仁智は無窮 穎才を研きよき地球人たれ 」

以上、令和5年度穎明館中学高等学校第1学期始業式の式辞といたします。